# 誘惑の女教師

## 肉罠に堕ちた少年

茶瓶

挿絵／辰波要徳

リアルドリーム文庫／PDF立ち読み版

KILL TIME COMMUNICATION

Contents

# 目次


第一章　憧れの人……4
第二章　淫らな罠……30
第三章　甘い奈落……86
第四章　女教師の饗宴……129
第五章　二人の時間……172
第六章　愛情の螺旋……213
エピローグ　幸せの原則……250

## 登場人物 *Characters*

### 冴島 智樹
(さえじま ともき)

真面目で融通の聞かない性格の生徒会長。まっすぐな性格ではあるが、相手に強く出られると流されてしまう事も多い。美咲は幼馴染で姉のような存在。

### 南雲 響子
(なぐも きょうこ)

プロポーション抜群の新任の教師。妖艶で格好良い女性。明るく奔放な性格で生徒に人気がある。優秀ではあるが性癖が歪んでおり、若い男を弄ぶのを好む。

### 芹沢 美咲
(せりざわ みさき)

母性を感じさせる巨乳が特徴の女教師。明晰で誰にでも優しい性格から、男女問わず生徒にも教師にも人気がある。智樹にとって子供の頃からの憧れの的。

## 『第二章　淫らな罠』より

慌てて席に戻る亮太。しかし未だ俯いたままの智樹を美咲は不審がる。
「冴島君？　どうしたの、身体の調子よくない？」
心配して声をかけてくれたのだろうが、智樹は罪悪感から美咲を真っ直ぐに見ることができなかった。結果的に彼は美咲を女として穢し、犯したいと願ってしまった。憧れの女性を自らの手で貶めてしまったのだ。どこに合わせる顔があるだろうか。
頑なな男子生徒に、この場ではこれ以上声をかけても仕方がないと判断したのか、授業を始める。
しかし智樹は全く集中できずにいた。こんなことは初めてだった。ましてや美咲の授業である。普段なら放っておいても頭から勝手に入っていくというのに。
（……これからどうなってしまうんだろう）
最悪の弱みを握られた以上、これからどんな目に遭わされてしまうのか…陰鬱とした気分で絶望に浸る。とても授業など聞いている気分ではなかった。
ふと、廊下から視線を感じた。
（南雲……先生!?）
響子が、智樹に視線を送り何事かの目配せをしていたのだ。
（まさか…授業を抜け出せっていうんじゃ……！）

響子にはあの日、いつどんな時でも言うなりになるように命令をされている。それは授業中でも例外はないと言っていたが、まさか本当にするとは…。
「その…芹沢先生……」
よろよろと具合が悪そうに手を挙げる。実際具合は悪いので説得力はあるだろう。
「どうしたの冴島くん。やっぱり具合が悪くなったの？　保健室に行く？　連れて行きましょうか？」
相変わらずの過保護っぷりに、少し苦笑しながらも同行を遠慮する。
「すみません大丈夫です。少し休めば治ると思いますから……」
それだけ言うとそっと教室のドアを開けて廊下に。響子は教室の中から死角の位置に立ち、保健室の方向を促した。
こんな事をしたのはもちろん生まれて初めてである。さらに言うなら保健室の世話になることも初めてかもしれない。正確には世話になるわけではないが。
保健室には幸いか否か誰もいないようであった。響子は周りに人がいないことを確認すると後ろ手に鍵を閉めた。
「南雲先生。こんな所に連れてきて…」
「その、南雲先生って言い方、固いわねぇ。これからは響子先生って呼びなさい。い

いわね」
有無を言わせぬ口調。教師を下の名前で呼ぶのも初めてだった。
「じゃあ、響子先生一体、何事ですか？　僕、授業をサボるのなんて初めてですよ。くだらない用事だったら…うわっ！」
ドサっと響子がタックルを仕掛け、体重に押された智樹は白いベッドに押し倒されてしまう。
「何をするんですか？　やめてください…！」
スポーツが得意だという女教師は男顔負けの力で、智樹の抵抗を奪う。
「ふふ…何をするかって？　とっても……いいコト…よ」
右手で隣のベッドとを仕切るカーテンをシャッと閉めると、もう片手でズボンのベルトを緩め始める。
「な…なにをッ！」
必死に抵抗するが、女の手つきはやけに手馴れていて、あっという間にズボンを脱がされてしまう。
「やめ……やめろッ！」
乱暴な言葉使いが口を出る。前日はうやむやのままに行為に至ってしまったが、本

来セックスのような性的行為はお互いの同意と好意があって初めて為されるものだという信条があった。
「こういうのは好きな人同士がするものだ！　離せッ！」
しかし響子はまるで意に介していない様子で、男子生徒とのグラウンド勝負を楽しんでいる様子だった。智樹はベッドに完全に寝かされた状態で、下半身に取り付かれてしまった。
「気持ちよかったでしょ……？　この前の……今度はもっと、もーっと…気持ちいいこと……してあげるわよ」
熱っぽく囁く。熱い吐息が顔まで伝わってきそうだ。
「あれは……その……」
目前にフェロモンをぶつけられ、しどろもどろになってしまう。戸惑う頭の中には微かにこれからされる行為への期待も含まれていた。
「でも、僕には心に決めた人がいて……」
「美咲先生…？」
すぐに言い当てられて、口ごもってしまう。
「うふふ…好きな人のために操を立てるなんて。とっても純情なのね……ますます

食べちゃいたくなるわ……」
響子が白いブリーフ越しに膨らみ始めた亀頭にねっとりとキスをする。女の口内から発せられる熱が、先端部分を包み込み、
「ううッッ……」
それだけで。腰が蕩けそうになる。ジンジンとした甘い痺れがペニスの中を回り回ってより強く肉竿を充血させる。
その場でちゅっちゅっと何度か吸引し、唇がそっと離れていく。血のように紅いルージュが真っ白な生地に唇の跡を残した。赤い花びらのような形をしたそのいやらしい痕跡に激しい劣情を高められる。
「はぁ……はぁ……ッ…」
たった一回の唇での淫技に、息も絶え絶えにされてしまった。彼女は先ほど智樹を狂わせた魔の唇を妖しく歪め、邪悪な笑みを浮かべる。
「うふふ……大人になりたいんでしょ？　だったらこれくらいの事…我慢しなきゃダメよ……んむ…ぅっ」
そんなことを言いながら、彼女の唇が再び亀頭部に被さる。智樹の我慢をまるで無視するかのような悦楽を与えてくる。まるで赤子扱いをするように智樹の性感を高め

てくるのだ。
（……このまま響子先生とHなことをしたら大人になれるんだろうか……）
バカな考えが頭をよぎる。ペニスを咥えられて気持ちいいから、ただ自分がHがしたいだけじゃないか。そんな事で美咲を裏切る理由になるものか……。
「考えても駄目よ。こういう事は感じないと……ダメ……」
れろぉ……ッ。
赤みを帯びた舌がブリーフに浮かんだ肉竿を丹念に舐め回す。時になめくじのようにゆっくりと這い回り、時に鋭くすぼめた舌で側面をチロチロと舐める。
「うッッ……はうっ……！」
堪えられない声が智樹の口から漏れ出す。響子の巧みな舌技は、今まで経験したことのない快感を彼に与えていた。下着越しにしゃぶられるという異様な状況もまた情欲を高める要因の一つとなっている。
執拗な奉仕にペニスは完全勃起状態になってしまっていた。女性に肉棒を舐められるという初めての体験に酔いしれる。響子が唇を離すと、亀頭部は先走りの液でぐしょぐしょだった。それが女教師の唾液と赤い口紅と混じり合い、まるで女性器のようなピンク色の跡がパンツに残っていた。

「あはは……ッ。すっかり準備万端じゃない…それじゃあ……すぐに天国に連れて行ってあげるわね♡……」
するするとブリーフをずり下げ、完全勃起状態のペニスを取り出すと、磁器のような美しい手をそこに寄せる。
「うっっ……！」
直接女性の手で触れられるのも初めての体験だ。美術品のような美しく白い手が自分の汚いものを撫で回しているというだけで、興奮は高まっていく。
「さぁ……それじゃあお待ちかねの……あぁむ……」
響子は仰向けに寝転がる智樹の下半身に覆いかぶさると、その凶悪にそそり立つ肉の先端に厚めの唇を寄せてくる。
「んむむ……はあむ…」
甘い鼻声と共に、反り返った勃起に紅い唇を被せてくる。肉の先端が柔らかい粘膜に包まれる、その言葉にできない快楽。腰の奥で痺れるような愉悦。そして。
（暖かい……ぃッ!!）
そのヌメる口内の暖かさといったら。まるでドロドロのスープの中のような熱気。それでいて濡れた粘膜がピタっと勃起に張り付いてくるのだ。

「んうぅぅッッッ……」
数刻前まで抵抗していた両腕から力が抜ける。ただ咥えられただけだというのに、まるで自分の身体を完全に支配されてしまったかのようだった。
「んぐぐ……ッ…あむ……んふぁぁ……ん……ちゅうぅ」
さらにググっと深く含まれ、ペニス全体が女教師の口の中に包まれる。そして軽く吸引されると、お尻の奥から何かを吸い取られるような脱力感に襲われた。
「あぁぁうぅぅぅッッ……!!」
あまりの悦楽に唸ることしかできない。いやらしい唇がキュッと締まるたびに身体が燃えるように熱く疼き、ペニスの裏辺りがドロドロに溶けてしまうかのような感覚が尿道まで伝わってくる。
「うふふ……どう？　生まれて初めてのフェラチオのお味は？　…もっと…いっぱいしてほしい……？」
亀頭に舌をペロペロと這わせながら、上目遣いに妖艶な表情で聞いてくる。答えはわかっているくせに、さらに智樹をいじめるように亀頭の溝の部分に舌の裏の部分を絡ませ、先端をヌルヌルと刺激してくる。
（気持ちいい……ッ！）

思わず叫んでしまいそうになるほどだった。このまま響子の口腔内に包まれながら射精できたらどんなに気持ちいいだろう。

（美咲姉ぇにされてるわけじゃないんだ……我慢しろ……我慢しろぉぉ…）

優しい姉の姿を思い浮かべ、邪な快感を振り払おうと努力するが、腰奥をとろかすしっとりとした舌使いは、そんなグラグラの理性を打ち砕くのに十分な威力を発揮していた。

「ウフフ…とっても感じちゃってるみたいねぇ…それじゃあ……もっと、ねっとり…としゃぶってあ・げ・る♡♡」

厚め唇が深く男の肉を頬張る。カリの部分に執拗に舌を絡ませ、濃厚な奉仕をお見舞いしてくる。腰砕けになった智樹をさらに追い詰めるように口内で妖しく舌を蠢かせる。自分の目では見えない部分で施される淫らな技に、智樹のスケベな妄想も膨らんでいく。

「ちゅぶぶっ…あああんおおぉ……んん…んぐ……」

喉奥に亀頭が届くほど思いきり含むと思いきり吸い上げる。口内が真空になるほどのキツイ吸引に意識が飛ばされそうなほどの激感が肉棒を震わす。

さらに深く肉を咥え込み、何度も何度も往復をし始める頃には、もはや智樹の身体

は無抵抗に快楽を受け入れてしまっていた。口腔内で濡れた舌が何度も亀頭にまとわりつき、紅い口紅の跡が残るほどに牡肉を味わう。

（あぁ……さきっぽが……とろけるぅぅ……）

亀頭部を柔らかく唇で包まれ、時に強烈に吸い立てられ、時に優しく包まれるその感触がたまらない。黒のキリっとしたボブカットを揺らしながら、熱心なフェラチオ奉仕を続ける響子にもはや逆らえなくなっていた。

ちゅぷッ……ぴちゃぷッ！ぬちゅ……ッッ。

目をつぶればその淫音が一層性感を高めてしまう。視線を逸らそうとすると、むにゅっとベッドに押し潰された魔乳が嫌でも視線の奥に焼き付いてしまい、一層興奮が煽られる。

まるで逃げ場のない快楽地獄に落とされてしまったかのようだった。

「うふふ……私のおっぱい気になる？　それじゃあ……」

一旦口を離す。悪魔の唇から解放され、ホッと一瞬の息をつく暇もなく、女教師は、スーツの谷間からメロンのような魔乳をプルンと取り出し、見せ付けるように何度も揺らした。柔らかく弾力に溢れる美肉に、思わず見とれてしまう。

「このやわらかーい…おっぱいでオチンポ可愛がってあげるわね……♡」

むにゅんッ。
魅惑の谷間に肉棒が挟み込まれる。智樹の立派なペニスは響子の巨乳に完全に埋もれてしまった。
「おほぉぉぉぉぉッッ！！！」
恥ずかしい声が口をついて勝手に出る。想像するだけでたまらなかったオッパイの感触が、自分の欲棒を直接包んでいるのだ。
「どう？　私のオッパイの感触は？　たまらないでしょう…。それじゃあそろそろ…パイズリの快感を味わわせてあげる……♡」
赤いルージュを塗った唇をペロリとヒルのような舌で舐め、響子の胸が動き出す。何とも言えない圧力が先端から根元までを包み込み、射精寸前だったペニスがさらに熱く滾るのを感じた。白い肌が肉の棒を極限まで圧迫し、快楽を与えてくる。
「ううッ……はぁ……ッ」
熱い吐息を保健室の中に漏らしながら、智樹はパイズリの快感に屈していく。瑞々しい果実のような双乳の狭間で赤く充血した亀頭が見え隠れし、自分が責められているという実感が強まってしまう。
むにゅにゅ…ぷるん…むちゅう……ッ

「ほら？　どぉ…？　パイズリって気持ちいいでしょぉ？　智樹クンのオチンポ…私のおっぱいの中で溺れさせてあげるわね……うふふふふ……」

うっとりとした言葉で誘惑をしかけてくる女教師。むにゅむにゅっとした感覚がさらに活発に動き出す。二つの乳肉に挟んだ肉をいじめるように両手でこね回し、何度も何度も亀頭を包み込んでくる。

（くッ……はッ……なんて気持ちいいんだ……ッ）

吸い付いてくる肉の快感は、もはや想像を超えていた。智樹にできる抵抗といえば、ベッドのシーツをぎゅっと握り締め、口から情けない声が洩れるのを何とかこらえることだけだった。

「チンポの先から何かヌルヌルしたものが出てきたわよ……あは……男臭くて…若い子の濃くてドロドロの精液の匂い……私のオッパイが気持ちよくてしかたないんでしょ……智樹クンってとってもスケベなのね……」

先ほどフェラチオをしていたときから溢れるほど出ていた先走り、智樹が感じている証を、ことさら強調するように。官能的な唇から飛び出す淫語に智樹の屈辱感が高まる。さらに、ミチミチに密着してくるパイズリに堪えられず顔を出した亀頭に熱い吐息を吐きかけながら言葉攻めしてくる。

「私のパイズリたまらないでしょ…？　もっと感じてガマン汁漏らしていいのよ…」
極限状態のペニスの匂いに興奮したのか、淫技がさらに勢いを増していく。どこまでも柔らかく怒張を包み込んだかと思えば、プリプリした弾力で怒張を押し潰す。さらに谷間から出た亀頭部にねっとりと唇を被せ、吸引してくるのだ。しっとりした汗を含んだ乳肉が張り付くようにペニスの表面を刺激し…、
「あっ……あっ…はぁ……ッ」
いつの間にか恥ずかしい喘ぎが零れ出ていた。智樹もまた響子の興奮した汗と女の体臭、自分の怒張から漂う精臭が混じり合った性臭に激しく興奮を煽られていたのだ。女教師の妖艶な魔乳から自分の亀頭が飛び出している様は何度見てもたまらない。軽く先端を舐められると腰がビクンビクンと震える。妖艶な唇と乳房がもたらす絶え間ない快楽が智樹の情欲を熱く高めていく。刺激を受けすぎた肉棒は、真っ赤に充血し、濃厚なミルクを溜め込んだ精嚢が重く痺れ、射精の瞬間を今か今かと待ち構えていた。
「ウフ……オチンポの先っぽビクビクしてるわよ……ザーメン出したくてたまらないんでしょ。ココに溜まった精液、どぴゅどぴゅって出したいんでしょ…♡」
心を見透かす妖しい瞳。反論は許さないとばかりに胸と赤い唇を使ってペニスを追

い込んでくる。
（ガマンしなきゃ……ガマン……ッッ――――）
「うふふ……我慢してるの？　可愛いわね……じゃあ無理矢理にでも射精させてあげるわ……私のパイズリにいつまで堪えられるかしら……」
響子はチュッチュっと亀頭にキスを繰り返しながら、二つのたわわに実った乳房を両側からこね回すように智樹の我慢ができない部分を責め立ててくる。彼の我慢など最初から無駄であったかのように、性感を丸裸にされ、射精を強要される。智樹はもはやなすすべもなく、荒い息を漏らしながら、魔乳と舌にいたぶられる自分の肉棒を何とも言えない気持ちで眺めているだけだった。
「っっ……もうダメ……だ……我慢できないッッ!!」
腰奥で何かが膨れ上がり、爆発するような感覚。腰が勝手にグンッと突き上がり、ゾクゾクした物が背筋を走っていく。全身が反り返る感覚。
「ホラホラ…、いいのよ。もう我慢しなくて……私の胸に思いっきり射精してぇ……オチンポにたまったザーメンたっぷり射精しなさい……」
優しい囁きと共に、パイズリの圧迫感が強まる。そしてビキビキに充血した亀頭に唇が寄せられ、ねっとりと吸い上げられた瞬間。

「あぁぁぁぁぁぁいくぅぅぅぅぅぅぅッッ！！！！！」
どびゅッ！　びゅびゅびゅびゅびゅびゅるるるるるっるる！！！
極限まで我慢した牡汁が勢いよく発射される。尿道が吹き飛んでしまいそうなほどの快感に気絶しそうになる。泣きたくなるほどの快感。魔性の乳肉に包まれながらの射精は格別のものだった。腰奥が快楽に痺れてしまい、言う事を聞かない。ビクンビクンと腰を突き上げ、何度も何度も女教師の顔を、胸を白く汚していく。
「ふむじゅぷっ……んむむ…あぁん……すごい勢い♪　飲みきれないわ……」
顔を熱く真っ白な白濁液で汚される快感に酔いしれる女教師。顔から溢れ出した精液を指ですくっては舐め、さらに濃厚なミルクを噴き出し続けるペニスに何度も塗りつけるように胸で挟み込み、刺激を続ける。
智樹は魂まで抜けきってしまったかのような恍惚に浸ったまま、眠りに落ちたのだった。

## 『第三章　甘い奈落』より

「ズボンの中で射精するのはみっともないし、イヤよね？　フフ……それじゃあ外に出してあげる……」

熱い囁きと共に、女教師の指が制服ズボンのファスナーにかかる。

「ちょっ…と…待って……ください」

さすがに慌てて、大きな声が出そうになる。しかし智樹の抵抗もむなしく、完全に後ろから押さえ込まれ身動きが全く取れない。逆に響子の指は狭い中、智樹の手をくぐり抜け器用にズボンのファスナーを下ろしていく。

（こんなところで……ッ）

公共の場で性器を出されるなど信じられない。最後の最後まで抵抗したが、女の手つきはまさに「慣れた手つき」だった。全く智樹の妨害をモノともせず、ついに勃起を外に出されてしまう。

「あはッ……」

響子の小さな歓声が上がる。パンツの中から隆々と立ち上がった肉棒をうっとりと見つめながら、弾力のある胸を押し付けてくる。

「くっ……ッ」

バスの中でペニスを出される羞恥。いくら車内からは死角になっている場所とはい

え、その屈辱は言いようのないものであった。
（なんてことをしてくれるんだ…この女は……ッッ！）
あまりの屈辱感に、頭が沸騰する。普段は大人しい智樹だったが思わず怒鳴りつけてやろうかと思ってしまったほどだ。
そもそも痴漢には常々嫌悪を抱いていた。相手が無抵抗なのをいい事に自分の欲求を果たそうなどという卑劣な行為。男の風上にも置けない。絶対に許されざる行為だ。そう思っていた。が、まさか自分がその被害者になるなどと想像だにしなかった。
憎しみにも似た気持ちで背後の女教師を睨みつける。しかしそんな強い視線もどこ吹く風、舌なめずりをするように目の前の獲物へと襲い掛かる。
きゅ……ッ。
まるで怒りを静めるように優しく肉竿に触れる。この熱気の中、妙に冷たい手が胴部を握る感触が心地いい。軽く握ったままで数回しごかれる。服の中でずっと圧迫され続けていたペニスに外の空気が触れ妙な気分になる。
「バスの中だっていうのに…。こんなに元気にしちゃって……恥ずかしい子ね」
短く、たしなめるように囁き声を吹き込んできた。
（この声を…聞くと……ボーっとしてきて……）

まるで魔法にかけられたかのように、抵抗が弱まっていく。それと同時に背後の女教師の熱気が伝わってくる。豊満な肉体で全身マッサージをするように、身体を押し付けてくる。響子もまた興奮しているのだ。

「あの子、智樹クンと同じクラスの子じゃない？」

女が窓を指差す。一瞬窓の外の事かと思い、顔を下げたが、指し示していたのは窓の反射。つまり車内だ。

（涼風（すずか）…さん…？）

同学年の中でも可愛いと評判の子だが、智樹とは顔見知り程度だった。しかしそれでもクラスメイトの女子に自分の痴態を見られてしまうかもしれないという事態に羞恥心が再び湧き上がってくる。

「今、あの子をココに呼んだらどうなるのかしらねぇ……」

恐ろしいことをさも楽しげに言い出す。しかもこの女教師なら本当にやりかねない。そう思わせるほどの迫力があった。

（やめろ……こんな姿……見られたら……ッ）

身を焦がすほどの屈辱。だが、恥ずかしいことにクラスメイトの女の子に見られてしまうかもしれないと思えば思うほど、その背徳感が快感に変わっていくのだ。

「うはッ……ふぅ……ッ！」
そんな智樹をからかうように、手の動きも激しくなる。
亀頭を握って下部分をぐりぐりと、さらに先から滲み出た液体を亀頭全体にヌルヌルとまとわりつかせてくる。
「誰に見られるかわからないところで、チンポしごかれる気分はどう……？　たまらないでしょ……」
くっちゃ……くっちゅ…くっちゅ……！
淫らな音をわざと立てるように大胆な手つきで肉棒をしごかれ、鮮烈な快美に苦悶する。さらに女の白い手の平全体を使って根元から強く握り締め、先走りを全体に塗り込むように淫らな動きを見せる。それと同時に耳たぶを咥えられ、ぴちゃぴちゃという唾液の音を脳に送り込んでくる。
「ほらぁ……ここ気持ちいいでしょ？　亀頭がパンパンに膨らんできた。今にも破裂しちゃいそうねぇ……」
少年の弱点は全てお見通しとばかりに、鋭い淫技を繰り出してくる。お腹の底から湧き上がってくるような重い愉悦に全身を震わせる少年。そしてその姿は女教師の嗜虐心をますます燃え立たせていた。

「くはっ……！」
智樹は蹲って必死に声を抑えるので精一杯だった。全身に汗をにじませ、顔を真っ赤にし、股間から伝わるとろけるような甘美な攻撃を受け続ける。抵抗するでもなく、金属製の手すりを両手が白くなるほどに強く握り締め、ただ快楽に耐え続けるのだった。
「フフ……こっちも楽しませてちょうだい……」
右手で肉棒をさすり続けながらも、手すりを掴んでいた手に響子の左手が添えられる。智樹の手はそのまま誘導されるまま、女の下半身へと近づいていく。
「あ……っ」
サラサラと肌触りのよい高級下着の感触。が、すぐにびしょびしょに濡れた感覚が指に触れる。響子が感じている証拠を露骨に知ってしまい、情欲がますます高まってくる。
ぐちゃ……ッ！
何かぐっしょりと濡れたものに触れた。それはとても柔らかく、暖かく、びっしょりと濡れてヌメヌメとした感触で、どこか……いやらしかった。
（こ……これ……は……ッ!?）

「そう、オマ〇コよ……」
脳天にズシンっとくるほどのいやらしい言葉。智樹は初めて触れる女性器の感触に頭が真っ白になった。
「私、今日ノーパンなの。暑いから脱いできちゃった」
今の状況も、自分の危機も、女の言葉も全く頭に入ってこない。自分が感じていた屈辱すら忘れ、指の先の感触に集中する。
（これが…こ、これが…オ…オマ〇コの……感触……ッ！）
ビデオで、Hな本で何度も見たあのいやらしい濡れた花弁。何度か憧れの美咲のそこを想像した事もあった。あのいやらしい部分はどんな感触なんだろう、触れられたらどうなってしまうのか……。そんな男の子らしい逞しい妄想が今現実のものとなっているのだ。
「あぁん……ッ……っふぅそう、もっと触って……♪」
さらに響子の手によって、指先が強く女性器に押し付けられる。ぐちゃぐちゃに濡れた肉の感触。シルクのように滑らかな部分もあれば、猫の舌の表面のようにざらざらした部分もある。それに熱い…。女の膣粘膜はとろとろに煮込んだスープのように熱く濡れていた。新たな発見ばかりの女の部分への感動にもはや思考がストップして

しまっていた。
ぐちゅ……ッ。ぬちゅ…ッ。ぐぽッッ。
指が積極的に動き出す。この熱さを、濡れたいやらしい感触をもっと味わいたいとばかりに指先を伸ばし、膣壁を引っ掻くように刺激していく。
「あん…ッ…あッ……」
わざとHな喘ぎを智樹の耳に吹き込む。智樹の指を誘導していた手は今は彼の制服の中に忍び込み、胸元を刺激していた。快感に浮かされた智樹の身体はどこも熱を持っていて、乳首をなぞられるだけで、身体が蕩けるような悩ましい感覚に苛まれてしまう。胸を撫でられ、肉棒をさすられ、そして片手は女性器の中。完全に女教師によって捕らえられてしまっている。
「ふう……ッ…後ろ向いてたらしっかり触れないでしょ……こっちを向いて…」
響子に言われるがまま、向かい合わせになる。真っ先に飛び込んでくるスーツに包まれた豊満な肉体。それもすぐ目の前にだ。その瑞々しい感触が身体に伝わってくる。汗に濡れた双乳がバスの揺れに合わせて揺れる様がたまらなく興奮した。女教師のムチムチの身体のせいで角度的に女性器を見る事はできなかったが、鼻いっぱいに伝わってくる響子の汗の匂いで智樹は十分に囚われていた。

「はぁっ……はぁぁッ」
もう、指が止まらなかった。もう女教師の誘導はないのに、指の動きはますます活発になっていく。膨らんだびらびらを指で挟み込んで擦り合わせたり、膣深く突っ込んだ指先を鉤状にして引っ掻く。熱い粘液が溢れ出てきた奥に指先を伸ばしコップをマドラーでかき回すようにグルグルと指を回した。智樹が指を動かすたびにぐちゃぐちゃと聞くに堪えない粘着音が下腹部から鳴り、なまじ見えないために、妄想の中の女性器の淫靡さは極まる一方だった。女の嬌声も少しずつ高まり、お互いの肉悦も高まっていく。
（あぁ……これにチンポを突っ込んだら……すごく気持ちいいだろうなぁ……）
妄想が止まらない。興奮の頂点に達していた智樹は、指先の魔の淫花に完全に心奪われていた。粘膜をこね回すたびに、何とも言えないHな匂いが漂ってくる。その蜜の香りをもっと楽しもうとさらに勢いよく指を抜き差しする。
「はぁ……はぁ…ッ…はぁ……ッ」
二人の吐息が交錯し、汗の匂いもまた混じり合う。身を包む激しい興奮がもはや取り返しのつかないところまで昇ってきてしまっていた。
「ふふ。もう限界みたいね……」

身体を撫でられながら、手の中にすっぽりと収められたペニス。もはや抵抗はかけらもない。完全に響子の与える快楽に為すがままになってしまっていた。

「あ……もう……ッ」

もう我慢できない。一刻も早い放出を望んで怒張がビクンビクンと跳ねる。

（このオマ〇コをかき回しながら……イきたい……ッ!!）

これが智樹のあさましい心からの願いだった。指先に伝わるいやらしい触感と共に射精できたらどれだけ気持ちよくなれるだろうか。そんな妄想をしていたら、もはやそれしか考えられなくなっていた。胸が締め付けられるような甘い期待に腰が疼く。早くトドメを刺して欲しかった。

「ほんとは、美咲先生にしてもらいたかったんでしょ？」

ビクン！　心臓が跳ねる。たった今まで忘れていた愛しい女性。汚らわしい性の対象にしたくないのに、いつも穢してしまう。

「フフフ……美咲先生が好きなのに私の指でびゅッびゅッって…イっちゃうの？　バスの中で痴女をするような女の手に射精しちゃうの……？」

心の中まで陵辱するかのように、智樹を責め立ててくる。急速に湧き上がる背徳感と羞恥心。しかしそれはもはや智樹の快楽を加速するスパイスでしかなかった。

レバーを捻るように亀頭を左右に揺さぶり、先端から根元まで満遍なくしごく。左手では乳首をキュウッキュッと摘まれ、首筋を舌が這う。官能的な唇が顔を這い回り、顔に甘い吐息が吹きかけられ……全身から襲い掛かる甘い愉悦の嵐に、熱いトロミが尿道の近くまで昇ってくるのを止められない。

それと同時に響子の肉襞がキュッと智樹の指先を締め付けた。ヌルヌルしたものに手を包まれる感覚に頭の中が痺れる。

（あぁッッ！　……ごめん美咲姉ぇ……ッ……イクッ!!）

「ん――――――ッッ！！！！！！！！！」

びゅるるるるるるぶぶぶぶ！！！

片手で口を押さえながらの絶頂。小刻みに身体を震わせ、腰をひくつかせる。尿道が吹き飛ぶかのような快感。

（はぁぁぁ……ッッッ……気持ちいいッッ……！！！！）

ガクガクと背中を震わせ、射精の快感に浸る智樹。ここがバスの中であることを自覚しながらも、この快感からは逃れられない。

びゅっ!!　びゅるッ！　びゅぶっっ！

「うふふ……外での射精は格別でしょ？」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
**株式会社キルタイムコミュニケーション**
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

**http://ktcom.jp/**

# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

## http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!